

徒然草

中国寄りに大変身したカンボジア

松田教男
北海道教育大学函館校教授

1999年1月から2002年5月まで、私はJICAカンボジア事務所長としてプノンペンに駐在した。赴任直後の1999年3月には、最後まで抵抗していたクメール・ルージュ（ポル・ポト派とほぼ同義）のタ・モク元軍参謀総長が捕えられ、クメール・ルージュの影響が一掃されるとともに、プノンペンの国際開発援助機関の間では、「漸く政治ではなく経済の話ができるようになった」と、カンボジアの復興に本腰を入れる機運が高まった。

そんな中、日本も1991年の和平協定締結、1993年の第1回総選挙実施とその後の復興に向けた支援に引き続き、より一層カンボジアの復興を支えるべく、道路・橋梁改修、保健・医療、教育、上水道、法整備分野など、大幅に支援を拡充した。フンセン首相はこうした日本の支援に対し、単に量的な面だけでなく、事前の調査の緻密さや高度な技術など質的な面についても絶賛していた。他方、借款の場合は国際競争入札ゆえ中国企業が落札するケースが多かったところ、世銀やADBの常駐代表も指摘していたとおりに、彼らが建設した道路等の質の悪さに閉口していたこともあり、日本の無償資金協力により建設した道路・橋梁の高品質振りや出来栄えのよさには首相も惚れ惚れしていたようである。工事の竣工式典などでは直接フンセン首相からこの点をしばしば言及されたが、とにかく日本、日本人への信頼は絶大であった。

また、カンボジアは1999年4月に10か国目（最後）のメンバーとしてASEANに加盟したが、その頃は「ゴルフぐらいできないとASEANの一員として他のメンバーとうまくやっていけない（フンセン首相自身の発言）」として、閣僚級以上を含め多くの政府要人がゴルフに勤しんでいた。そうした折、フンセン首相は日本大使をゴルフに誘い、私も一緒にラウンドさせてもらったことがある。首相が使用するクラブ（の表面？）はゴールド、カートはベンツ、BGMは（意外なことに）民族音楽。同伴者は国軍参謀次長をはじめとする強面の側近。マナーは著しくよろしくなく、2度打ち、3度打ちは当たり前（何度打っても1打扱い）、グリーンまでの距離に関係なく自分が真っ先に打ち、グリーン上では側近が気を使ってパッティングを代行、入らないと怒って自分で打つが、グリーンに乗ればいつでも1パット。首相が出場するコンペの半数以上は首相が優勝すると側近から聞いた。プレー中、首相から「JICAにゴルフの技術協力をお願いしたい」と言われたが、「マナーを正すのが先決ですよ」と言いたいのをぐっところえて「前向きに検討します」と答えた。

首相のグループの前後20分相当程度は誰もプレーさせないが、あるホールで首相がティーショット（前ホールのスコアに関係なく常に首相がオーナー）しようとした際、100数十ヤード先をゴルフ場の従業員が横切り、猛烈に怒った首相が例のベンツで追いか

け怒鳴りつけるという場面を目撃した。当時、最初の就任（1985年1月、33歳の時）以来10数年首相を務めていたフンセン首相は、誰も対抗できる実力者がいないことから絶対的な権力者であり、JICAの仕事の関係でも幾度もワンマン振りを見せつけられていたが、プライベートな場で直接本人の言動に接すると、独裁者振りをより強く認識するとともに、カンボジアの内政も外交も全てフンセン首相が決めていることへの危うさも感じた。

因みに、フンセン首相は1970年代前半にロン・ノル軍との激しい戦闘で左目を失明し、ソ連製の義眼を入れていたが具合が悪く、1991年に順天堂大学で日本製の義眼に入れ替えてからは調子がよく、この頃から日本びいきが始まったと言われている。

私は2002年5月に帰国したが、帰国前にフンセン首相に挨拶したところ、私が在任中のJICAの援助量が2.5倍になったことに厚い謝意を示してくれた。また、帰国直前の無償資金協力で建設したかんがい施設の竣工式では、1万数千人の参加者の前で私の名前も挙げて日本の貢献を強調してくれ、気分を良くして帰国した。

帰国後もカンボジアの動きはフォローしていたが、2005年7月、国連改革の一環として安保理常任理事国を「現行5+G4（日本、ドイツ、ブラジル、インド）+アフリカ2」とする決議案が第59回国連総会に提出された際、日本からの再三のロビー活動にもかかわらず、カンボジアは反対を表明した。中国の働きかけが功を奏した結果ではあるが、これまでのフンセン首相の日本びいきが嘘のように中国寄りに転換したことに私は大きな衝撃を受けた。

その後、持ち回りでカンボジアがASEANの議長国を務めていた2012年のASEAN外相会議（7月）において、また中国の影響を象徴する出来事が起こった。南シナ海での中国との領有権問題について、フィリピンやベトナムがASEANの立場を共同声明に明記すべきと主張したのに対し、議長国カンボジアは取り上げようとせず、結局ASEAN外相会議では史上初めて共同声明の発表見送りとなったのである。議長国の権限が大きい上に、在任期間の長さを尊重するASEANにあって外務大臣歴の長いハオ・ナムホン大臣の発言力が強かったこともあるが、インフラ整備などで中国依存を高めていたカンボジアの中国寄りの姿勢が顕著に表れた結果である。

同年9月に「日・ASEAN連結性支援合同委員会」等に参加するためプノンペンを訪れた際、郊外の道路・橋梁を視察した時、過去に日本の無償資金協力で建設した道路（国道6A号線）のいたるところで、拡幅工事を中国の援助で実施中であった。また、プノンペン市内のトンレサップ川に架かる橋（通称「日本橋」）のすぐ隣では、中国の援助で新橋を建設中であった。こうした中国のやり方を見て、日本の援助の証、プレゼンスが埋没するようで、悔しくもあり情けない思いをした。

そして最近、2015年11月21日に第27回ASEAN首脳会議が開催された。中心議題はもちろん間近に控えたASEAN統合（2015年12月31日）であったが、南シナ海

における中国の人工島造成の問題も主要議題となったところ、フィリピンやベトナムが激しく中国を強く非難する中、カンボジア（フンセン首相）は紛争を平和的に解決すべきと、対中批判を抑えるよう求めた。加盟国間の調整は難航し、23日に漸く南シナ海問題に言及した議長声明を発表することができた。ASEANの意思決定は全会一致が原則のため、議長国マレーシアが粘り強く調整したのであろうが、22日の米中両国首脳もそろって参加した東アジアサミットでの議論の推移（中国側の劣勢振り）に意を強くして親中派を説得しきったものと思われる。とはいうものの、ここ数年の中国の分断政策が功を奏して、ASEANの結束が揺らいできているのは事実であろう。

私がカンボジアに駐在していた2000年前後は、中国の対カンボジア援助はわずかであり、外国援助全体の20%強を占めるトップ・ドナーの日本に比して、殆ど存在感はなかった。しかしながら、2009年頃に中国の援助額は日本のそれを上回り、CDC¹のデータによれば、2013年では日本の約1.52億ドルに対し、中国の援助は約4.14億ドルと日本の約2.7倍に達している。内容的には殆どが道路・橋梁などのインフラ分野に集中しているが、2013年の国家予算30億ドルの約14%を占めている。

IMFのDirection of Trade Statistics Yearbook 2011によれば、輸出においてはアメリカ向けの約34%に次いで中国向けが約26%を占めており、日本向けは1.6%に過ぎない。輸入においては中国からが約36%（第1位）であり、これも日本からの3.2%を大きく上回っている。また、CDCのデータによれば、1994年から2014年までの累計投資認可額は、中国がトップで20.8%を占める中、日本は1.3%に過ぎず、貿易・投資面ではもともと中国の存在感が大きかったことが分かる。

それにしても、あれほど親日的であったカンボジアが、私の帰国後いとも簡単に親中に転じたのは極めて残念である。これまで親密であった日本との関係を損ねてまで中国寄りの行動をとるのは、中国の影響力が避けがたいものになってきていると同時に、経済的実利を優先するフンセン首相の現実主義の現れであろう。

2013年11月ラオスのパクセで「ASEAN交通大臣+対話国・国際ドナー会合（第1回）」が開かれた際、カンボジア代表の旧知のトラム・イウテック公共事業運輸大臣は私の顔を見ながら、数件の個別事業への協力を熱心に訴えていた。そのうちの鉄道案件への協力要請に対し、中国側は自国に都合の良い広軌レールに固執するなど、営利主義的な対応が目立った。会議後に同大臣と話した際は、中国の援助による工事の品質の問題や自国利益優先の姿勢などに鑑み、できることなら中国ではなく日本の援助に期待したいと述懐していた。こうした声がフンセン首相に届いて、再び日本になびいてくれることを願うばかりである。

¹ カンボジア開発評議会（Council for the Development of Cambodia : CDC）のDevelopment Cooperation Reportによれば、2001年の国際機関・二国間ドナー等の対カンボジア援助総額（約4.71億ドル）のうち、日本が約1億ドル（約21%：贈与のみ）、中国は約0.16億ドル（約3%：贈与+融資）。